

明治維新150年特集

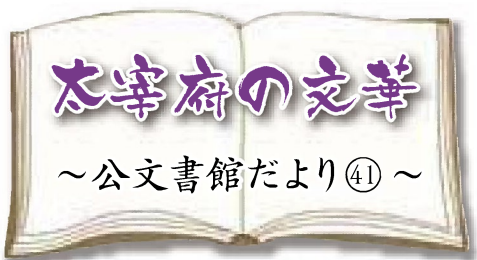
坂本龍馬の太宰府訪問

慶応元年（1865）年2月、尊攘派の公家三条実美をはじめとする五卿が太宰府天満宮の延寿王院に謫居してから、太宰府には、勤王の志士が頻繁に出入りするようになります。土佐藩出身の坂本龍馬もその一人で、同年5月23日から28日の間、太宰府を訪問し、五卿にも拝謁しました。五卿の一人東久世通禧は、彼の日記に「偉人なり、奇説家なり」との龍馬の人物評を記しています。

龍馬は太宰府を訪れる前は鹿児島に滞在しており、西郷隆盛らと交わる中で、天下国家のためには、当時反目しあっていた薩摩藩と長州藩が手を結ぶしかないとの意を強くします。そして長州藩を説得するため自ら出向く途中、太宰府に立ち寄ったのです。

龍馬はこのとき藩命でたまたま太宰府に来ていた長州藩士小田村素太郎（楫取素彦）と出会います。同席した同藩士時田少輔（時田光介）は、龍馬との面会を次のように述懐しています。

兩人（小田村・時田）同席にて坂本氏に面会いたしましたところが、坂本氏は初面会の挨拶をおわるや



否やただちに、薩長が今日の如く隔離しておつては、とても王政復古の事業を成就することはできぬ、互いにこれまでの行掛りは忘れてしまつて今日より提携をして、大いに国事に尽さねばならぬと思ふが、いかがであるかお前方の考えはどうかといふことであつた。

〔『史談会速記録』第二三輯〕

小田村らは確かにその通りであると同意したものの、自分たちに回答の資格があるわけでもないの、帰つて藩内の重要な地位の者に話をする と約束します。

龍馬はこの後、小田村・時田の周旋のもと、下関において当時長州藩で重用されていた桂小五郎（木戸孝允）と対談し、同盟問題を協議するた

め西郷と下関で会談することを承知させます。実際の薩長同盟の締結は、京都において慶応2年正月に行われますが、小田村自身も後に太宰府における龍馬との邂逅を「薩長講和の開始」であつたと振り返っていますので、ここ太宰府において薩長同盟実現へ一歩近づいたと評価してよいと思います。

太宰府市公文書館 朱雀 信城



明治維新150年特集

高杉晋作尊攘の信念

下関市長府の功山寺境内には、具足を着け帯刀した、馬上の高杉晋作像があります。これは、元治元(1864)年12月15日夜、当時功山寺に潜居していた尊攘派公家・三条実美ら五卿の寢所を雪中に突然訪れ訣別を告げ、総勢80人程度の隊を率いて挙兵した晋作の姿を表したものです。向かったのは新地会所(下関市上新地町)。ここは同年7月の禁門の変後、朝敵となった長州藩の藩政を掌握した、幕府への絶対恭順を旨とする俗論派政府の馬関根拠地でした。

晋作は長州藩士高杉小忠太(名は春樹)の嫡子で、名は春風、字は暢夫。晋作は通称です。晩年には谷潜蔵と改名。天保10(1839)年に生まれ、19歳のころから松下村塾に学びます。文久2(1862)年、幕吏に同道して上海に渡航。そこで晋作が見たのは、外国の支配下に堕ちたかつての強国・清の現状と西洋式軍備の脅威でした。この経験は彼の(軍備充実の上での)攘夷の信念を固める重要な契機の一つとなります。

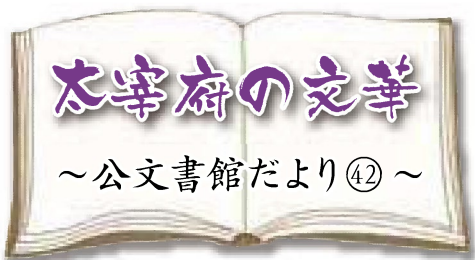
元治元年11月、晋作は筑前に潜行します。これは筑前勤皇党の一人、中村円太の画策によるもので、九州諸藩の尊攘派に連合の働きかけをねらった

ものでした。ところが目論見ははずれ、しかも晋作の不在中に長州藩では、藩主が詰め腹切らされても武装を解いて幕府を容れる方針の俗論派が台頭、この情勢に晋作は悲憤して国元に引き返し、ついに功山寺での挙兵に至ります。「自分がもし馬関で死ぬことができたら、招魂場におまつりください。(中略)前文に申し上げた通り、赤間関の鬼となつて討ち死にする結末なので、

(中略) 自分は死んでも恐れながら天満宮のごとくになり、赤間関の鎮主となる志です。」

『東行先生遺文』

これは、晋作が帰国後、筑前行に同道した大庭伝七(志士たちを援けた豪商・白石正一郎の実弟)に宛てた手紙の一文です。「天満宮のごとく」とは菅原道真のことを指すのでしょうか。晋作は天神



信仰に篤かったともいわれ、陣所に常にあつたという「菅原大神」(清末藩主毛利元純揮毫)の守護旗が遺されています。攘夷に討幕に、隊を率いて連戦した晋作でしたが、慶応2(1866)年の秋口から病により戦陣を離れ、翌春4月、29歳でこの世を去ります。時代の行く末を見ずしての永逝は、さぞ無念だったに違いありません。

太宰府市公文書館 藤田 理子



明治維新150年特集

筑前竹槍一揆と小野隆助

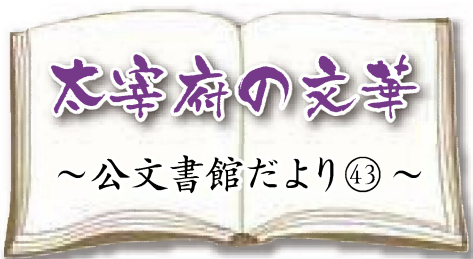
筑前竹槍一揆は明治6（1873）

年6月16日から発生した大規模な一揆で、福岡県全域（明治6年当時は筑前国の領域に重なる）に及びました。一揆の起こった原因は、明治政府が近代化政策を短期間に次々と実施したことにより、民衆の間に不安と不満が広がったことが一因とされています。決起した一揆勢は、商家や近代化の象徴である学校、役所、電信、ガス灯、洋館、官舎などを各地で破壊し、官吏を襲撃して死傷者を出しました。そして福岡県庁（旧福岡城三の丸）は襲撃され、ついには熊本鎮台（全国で6カ所に置かれた陸軍の軍事機構）の派兵という大騒動にまで発展します。

この竹槍一揆の鎮撫側として奔走した1人が、太宰府出身の小野（三木）隆助です。小野は太宰府天満宮の社家の生まれで、明治元年の戊辰戦争に参加し、同7年の佐賀の乱、同10年の西南戦争は政府軍として活躍します。

小野の筑前竹槍一揆における動向が明治30年「福岡日日新聞」に連載された「竹槍日記」という史料に記されています。

小野は当時、太宰府神社（現太宰府天満宮）の禰宜でしたが、旧藩士隊の大隊長であったからか、戸長らから御



笠郡における不穏な動きについて知らせを受けます。小野は福岡の元同僚の矢野尋六郎と相談し、県庁に向かいます。県は旧藩軍事総督である中村用六を鎮撫総督に任命し、本部を日蓮宗寺院勝立寺（福岡市中央区天神）に設置しました。各地に集合する土族隊は20余の小隊（1個小隊50〜100人）に編成され、小野・矢野らは大隊副官として作戦会議に参加しました。

小野と矢野は一隊を連れ、御笠郡米の山峠を越えて穂波郡内野宿に向かいます。鎮撫後、県庁に向かう一揆勢の急報を受けて鎮撫総督本部に戻り、一度はこれを防ぎますが、のちに、県庁は襲撃に遭います。この責任を取り中村が白刃するなどの混乱下に、小野らは仮県庁を福岡城本丸に設置して防備を固めます。以降、一揆は沈静化に向かいますが、約6万4千人が処罰されるといふ大きな傷跡を残しました。

小野はその後、明治23年の第1回衆議院議員総選挙で福岡県第2区から当選し、同31年には第7代香川県知事を拝命し、政治家として活動します。太宰府天満宮の境内に、今も小野の偉業を記す石碑がひっそりと建っています。

太宰府市公文書館 篠崎 将貴



明治維新150年特集

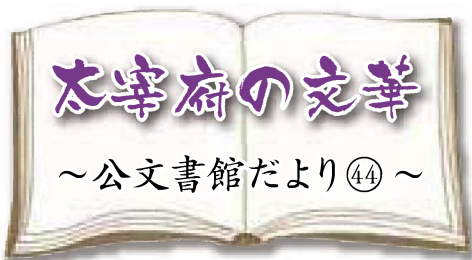
吉岡拜山と明治維新

吉岡拜山は、幕末から大正期を生き
た太宰府出身の漢詩人、文人画家です
が、明治維新と拜山との関わりについ
て、いくつかの史料からうかがってみ
ましょう。

拜山は、元治元(1864)年、19歳
で日田の私塾咸宜園に入門しました。
しかし、慶応2(1866)年、第二次
長州征伐に際して小倉城が落城すると、
敗兵が逃げ落ちてきた日田も大混乱と
なり、拜山はやむなく太宰府
へともどつてきます。

同3年春、京都に上り南画
家中西耕石の門を叩き画道
に志しますが、翌年(慶応4
年・明治元年)、明治維新を
迎えて京都も騒然となり、一
方で明治政府が書生の採用を
始めたことから、耕石のもと
を辞して、倉敷県書記局に奉
職し、官吏となりました。拜
山の明治元年の日記、十月五
日の項には、明治新政府と旧幕府勢力、
奥羽越列藩同盟の間に起こった戊辰戦
争のうちの東北戦争に関する記述がみ
えており、同席した者は、官吏として
新政府軍勝利の報に思わず快哉を叫ん
だと記しています。

明治11(1878)年、拜山が清国
(中国)を来訪し、その名所旧跡を訪ね、
文人たちと交流をもったことについて
はすでにふれたことがあります(『年報



太宰府学』10号)。この時に記された
清国の人びととの「筆談録」にも明治維
新にかかわる記述があります。たとえ
ば、日本における官吏登用法について
尋ねられて「戊辰(明治元年)以来、大
政一変、時に改革ありて、考試の法、
未だ確定せず」と答えています。別の
箇所でも、どのようにして官吏となっ
たのかを問われ、「弟(拜山が自らを謙
遜した自称)、固より才なし、徳なし、
芸なし、最も門地裔にあらざる。

只、人の成事に因りて驥尾に
附すのみ」また「我が邦、十年
前に覇政、今、王政に属す。
較挙人等の道、始めて開かれ、
いまだ完全ならざるなり」と、
明治新政府の官制の未整備に
言及しています。これらは、
拜山の前歴を知った清国の文
人たちが、自らの国と比較す
るため、日本の実情を尋ねた
ものでしょう。

こうしてみると、拜山にとっての明
治維新は、画道を捨てて官吏となると
いう、人生のひとつの転機だったと思
われます。拜山は、その後も東京に転
職となり官吏を続けますが、明治4(1
871)年、不慮の事故により右手を
失い、以降、官吏としての立身出世を
諦め、隻腕の文人墨客として生きる道
を志すこととなるのです。

太宰府市公文書館 重松 敏彦



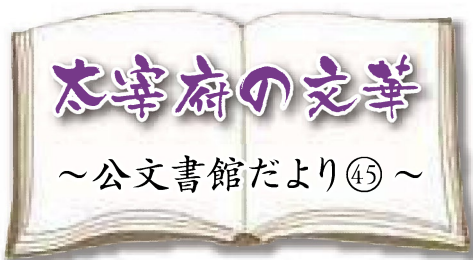
明治維新150年特集

太宰府における廃仏毀釈と天本茂左衛門

明治政府は天皇の神権的權威の確立のため、神道国教化政策を取りました。廃仏毀釈とは、その政策のもとで、寺院からの神社の独立や神社からの仏教的要素の除去などが行われた、寺院・仏像・仏具などの激しい破壊活動のことです。ここ太宰府でも、太宰府天満宮や竈門神社において、廃仏毀釈により仏教的要素が払拭されたことが、郷土史家の伊東尾四郎によって報告されています（『新編明治維新神仏分離史料』10）。

この報告によると、太宰府天満宮では、十一面観音立像が甘木市安長寺に、梵鐘と仁王像が観世音寺に（梵鐘は元來観世音寺のものであったが、一時太宰府天満宮に移されていた）、十二天立像が飯塚市太養院に移されています。竈門神社では、木像や仏具は焼却され、摩崖仏は梵字を削り取られ、五百羅漢は谷底に突き落とされたり、割られたりしています。下宮の祇園社には仏像を安置していたため、建物ごと燃やされてしまいました。

同報告には「太宰府神社の仏像、仏具、一切経、袈裟の類は肥前田代の天本茂左衛門が巧妙に請ひ受けて持ち去つた」と記されています。天本茂左衛門は、肥前国基肄郡田代領の出身でし



たが、幕末期に太宰府に出て出家し、3年ほど太宰府天満宮社家の六度寺で札配りを行っていたところ、社家の明星坊が20年ほど無住であったことから、復旧のためここに住居を移しました。その後、明治維新となり、廃仏毀釈運動のため破壊・焼却されそうになった仏像等を守るため、尽力したというわけです。

天本は、その後、宮浦村（現基山町）に浄土真宗東本願寺派明光寺を建てるため奮闘しますが、明治16（1883）年、落慶を待たずに死去します。明光寺の本尊は、天本が太宰府天満宮から請い受けたと思われる阿弥陀如来像でした。その他、基山山麓の天本の出身地とその周辺の集落にも、天本から譲り受けたと伝えられる仏像数体が遺っているとのこと。

廃仏毀釈により多くの仏像等が被害を受けたのですが、太宰府天満宮の場合には天本の活躍などもあり、ある程度遺っています。報告の記載以外にも、太宰府光明寺に十一面観音坐像・薬師如来坐像、同西正寺に聖徳太子立像、基山町大興善寺に十一面観音坐像など、市内外の寺院に移され、今も大切に安置されています。

太宰府市公文書館 朱雀 信城



明治維新150年特集

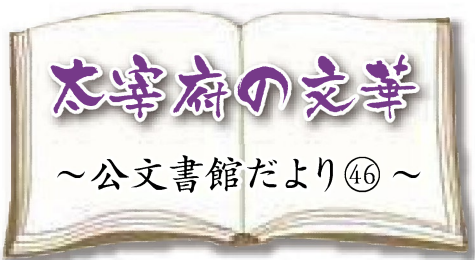
山本忠亮ただすけ至誠の魂

大正2（1913）年10月21日、延寿王院の山門前で七卿西竄碑せいざんの除幕式が行われます。文久3（1863）年8

月18日の政変により京を追われ西下することとなった七卿の姿を刻んだこの碑は、蓑笠姿での離京から50年という節目に建てられました。来賓として式典に招かれたのは、慶応元（1865）年から同三年の間、三条実美さねとみら五卿に従って太宰府に滞在した志士、土方久元もとと尾崎三良さぶろうです。土佐藩郷士が出自の土方は、明治期に農商務大臣や宮内大臣を務め、伯爵に叙せられています。

京都の宮家に仕えながら不遇の少年時代を過ごした尾崎も出世して男爵となり、宮中顧問官を務めました。立志伝中の人である二人がこの時忘れず訪れたのは、光明寺の丘陵にあった同志、山本忠亮の墓所でした（『尾崎三良自叙略伝』）。

土佐勤王党加盟者の一人、山本忠亮は天保13（1842）年の生まれ、「志操堅固、篤学の人」と伝えられています。21歳の時に三条実美の衛士となり、8月18日の政変後は西に逃れる実美らに随行します。しかしほどなくして肺を病み、摂生空しくその重篤なことを悟り、ついに慶応2年5月、「恥を知り捨るうき身も武士ものぶの道に違はぬ心なりけ



り」という歌を残し、ここ太宰府で自刃しました。享年25（瑞山ずいざん会編『維新土佐勤王史』他）。

除幕式で土方とともに往年の懐旧談を披露した尾崎は忠亮のことに触れ、彼の決心を、幕府目付小林甚六郎の来宰と結び付けて語っています（『福岡日日新聞』）。慶応2年、五卿の帰洛を促すため幕府は小林甚六郎を太宰府へ派遣しますが、五卿側は幕府による五卿

勾引の一大危機と警戒、五卿も書面をもつて従臣たちに不動の決意を示し、殉難の覚悟を告げます。五卿の近辺はにわかぼっぼつに緊迫し、「薩士は殺気勃々、毎日大砲を太宰府の裏手なる北谷村辺に牽き出し、火通しと号して連発し、其の響轟々として幕吏の胆をぞ冷しける」（『維新土佐勤王史』）状況となり、この中で忠亮は

慚愧ざんきの決断に至つたと回顧しています。その死を惜しむ五卿は金子15両を、さらに実美は20両と手向けの歌を忠亮に贈りました（『回天実記』『維新土佐勤王史』）。

剣太刀吾身つるるがみのうきに添ひ来つつ
旅路の露と消し人はも

墓碑は後に大町の光蓮寺に移され、忠亮の至誠の痕あとを現在に伝えています。

太宰府市公文書館 藤田 理子



明治維新150年特集

東久世通禧の長崎密行

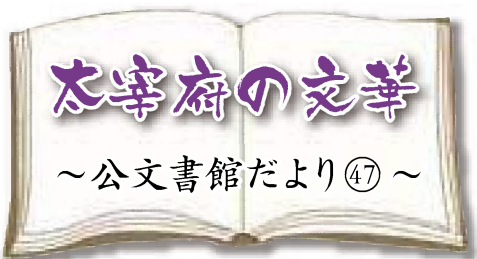
東久世通禧ひがしくぜ ちからとくみは五卿の一人で、文久3（1863）年8月18日の政変以降、長州を経て太宰府に慶応元（1865）年から同3年まで滞在し、多くの文化人や幕末志士達と親交を深めました。明治維新後は政府要職を歴任しており、明治23（1890）年に初代貴族院副議長、同25年には第3代枢密院副議長に就任します。

五卿は太宰府転座当初、九州諸藩の警衛の下、不自由な生活を

送っていたようです。しかし、慶応2年、第二次長州出兵が不調に終わると幕府の権威は失墜し、滞在後期には各地を遊行するなど五卿は比較的自由な日々を過ごしていました。東久世は帰洛がいよいよ現実味を帯びてきたころ、長崎行きを計画します。当時の長崎は、列強諸国との条約により外国人居留地が整備されており、各国商館が建設され、多数の貿易品と最先端技術が集まる場所でした。

東久世の長崎旅行は慶応3年11月24日から12月10日の2週間余の日程で行われました。東久世は薩摩藩士の協力を得て「薩摩藩士東十郎」と名乗り、身分を隠して長崎を目指します。

長崎では多数の人物と出会っています。その一人が薩摩藩士の五代友厚ごだいともあつで



す。五代は明治初期に実業家、政商として活躍しましたが、幕末には列強諸国を歴訪し、薩摩藩の貿易・近代技術導入に重要な役割を果たしていました。東久世は五代と「封建論」について議論をしたり、一緒に英国の軍艦や製鉄所を見物したりしています。かの商人グラバーとも会いました。「カラハア別宅」（グラバー邸のことと推測されます）で談話し、別の日には彼が経営する製茶工場を訪問しました。

東久世はそのほかにもオランダ領事館・写真店・蒸気精米場などを見学し、洋酒や西洋料理も堪能しています。米国人宣教師フルベッキやオランダ領事ボードウィンとも面会を果たし、また商館で小銃を購入しています。太宰府帰着後の12日、早速この小銃を内山村に設置された射撃稽古場で試し撃ちしました。

12月14日には帰洛が決定し、五卿は19日に太宰府を出発して27日に京都の明治天皇に謁見えっけんします。文久3年に都を追われてから雌伏の数年に耐えた東久世の長崎行きは、約2週間と短期間でしたが、西洋技術を精力的に見学し維新の立役者との交流を深める有意義な旅行となりました。

太宰府市公文書館 篠崎 将貴



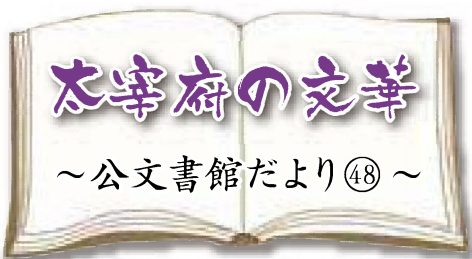
明治維新150年特集

安楽寺別当大鳥居信全

信全は、文政5（1822）年、京都に生まれました。天保3（1832）年、高辻家の養子として筑前太宰府司務別当延寿王院附弟（法統を受けつぐ弟子の意）に契約し、同6年、太宰府へと下向、その3年後に別当職を継承します。そして、嘉永5（1851）年には、「太宰府司務・天満宮留守・安楽寺別当・延寿王院主・権大僧都」となりました。

信全については、自ら記した『信全一世中略記』が遺っています。これまでの研究によれば、この記録には、まず天満宮安楽寺において行われた「御撫物送迎」「神忌祭」「神幸祭」、また「連歌法会」など、さまざまな宗教行事に関する事項が記されています。また、弘化4（1847）年、京仏師に依頼して、護摩堂に十二天を新造し、安政4（1857）年には、藩の許可を得て、長年の「志願」であつた「聖堂学校」の設立を始めるなど、安楽寺天満宮の整備充実にも努めています。一方、嘉永5年には御神忌九百五十年大祭を迎えて、これに専心している様子もうかがうことができます。

しかし、この『信全一世中略記』は、信全が別当職を信厳に譲った翌年の文久2（1862）年10月で終わっています。このあと慶応元（1865）年、文久3年8月18日の政変で、京都を追わ



れた7人の公家のうち5人（五卿）が、長州山口から筑前太宰府へと移つてくることになるのです。

信全の実父は梅小路定肖で、五卿のひとつである三条実美の父実万は信全のいとこにあたります。また、安政5年、京都に上つた折には、同じく五卿のひとつで、歌道を家業とする三条西季知に就いて和歌を学んでいます。こうした由縁もあつて、信全は五卿の寓居として延寿王院を提供するなど、彼らの太宰府滞在にはことに意を用いました。

慶応3（1867）年、五卿の復官帰洛を目前にして、別れを惜しむように五卿と信全の間で和歌の贈答が行われています。信全の一首に
天さかるひなにはあれど三年
までいましし宿を君な忘れそ
（大意）都から離れた辺境の地
とはいえ、3年もおられた仮

の住まいを忘れないでください）があります。これは奈良時代、筑前守であつた山上憶良が詠んだ「天離る鄙に五年住まいつつ都のてぶり忘れえにけり」（『万葉集』巻5 880番）をふまえたものです。信全は五卿に、立場こそ違え、都から遠く離れて太宰府の地にあつた古の宮人の姿を重ね合わせて、先の歌を詠んだのでしよう。

太宰府市公文書館 重松 敏彦



明治維新150年特集

太宰府への五卿遷座^{せんざ}

中央の政変により都落ちして長州藩に滞在していた五卿は、幕府による長州征討の危機と長州藩内の内部抗争状況のもと、福岡勤王党月形洗蔵らの活躍もあり、福岡藩に移ることになりました。元治2（1865）年正月14日に長州を出発し、筑前赤間宿に約1カ月滞在ののち、2月13日から2年10カ月、延寿王院（太宰府天満宮別当大鳥居家、現西高辻家）に滞在します。

8ツ時（午後2時ごろ）に太宰府に入った五卿は、浮殿前で輿を降り、延寿王院前院主大鳥居信全と現院主信巖とが門前まで出迎えます。信全・信巖が五卿にご機嫌伺いを行い、つづいて一山惣代として社家の執行坊・上座坊がご機嫌伺いをしました。翌日には五卿がそろって神前に参拝した後、社内を案内され、宝物を見物します。これらの手順は事前に福岡藩の寺社奉行にお伺いをして決められました。その際、ご機嫌伺いとともに五卿およびその従者らに「梅ヶ枝焼」を進呈したい旨、延寿王院から申し出ています。

また、五卿を迎えるにあたって、8



項目にもおよぶ注意事項が「御用日記」（延寿王院の公的記録）に記されています。これによると、火の用心を心掛け夜回りを厳重にせよ、社辺は茶屋年番が、町々は町役組頭が日々見廻り、気を付けて掃除するようになど、まちの管理一般に関わる事項のほか、五卿の遊覧に出会えばそれがお忍びであつても下座せよ、府中の子どもは社辺で遊ばないように、宿舍となる院内には不意に入らないように、裏山には子どもであつても上らないようになど、五卿に不敬がないよう、子どもの行動に至るまで規制する細やかな取り決めがなされていました。

ほかに、他藩のお尋ね者や問者（ス・ハイ）などが太宰府に入り込むだろうから、たとえ一泊であつてもその姓名を聞き糺して身元を申し出るよう、延寿王院から社中へ達しを出した記事が「御用日記」に残っています。五卿の受け入れに当たっては、地元にもひとかたならぬ苦労があつたようです。

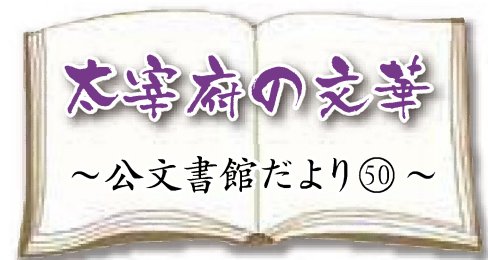
太宰府市公文書館 朱雀 信城



明治維新150年特集

廃藩置県で変わったもの

藩体制を維持したままで船出し機能不全に陥りつつあった維新政府が、明治4(1871)年、当時の政治状況を打開するために採った強行策が廃藩置県です。これは、地方を政府の支配下に組み込むための、中央集権化への一策でした。構想の提起からわずか10日あまりで、右大臣三条実美による詔書(天皇の意思を示した公文書)奉読の儀式が執り行われます。長州藩の鳥尾小弥太と野村靖が廃藩論の着想を山形有朋に持ちかけたことが発端で(推定7月4日)、井上馨、木戸孝允、西郷隆盛、大久保利通ら政権の行方に煩悶する面々の快諾を得て極秘裏に協議が進み、廃藩置県の断行が決まりました。14日、詔書により初めて事態を知った知藩事(旧藩主)たちには大きな衝撃でした(勝田政治『廃藩置県』)。



県では、第1区福岡・第2区博多以外はそれまで大庄屋が支配していた「触」をもとに34の区を置き、戸長・副戸長にはそれぞれ大庄屋・庄屋が充てられました。現市域を含む御笠郡は第23区(原田触)・第24区(乙金触)となり、第23区戸長は大庄屋の山内平四郎が(副戸長は庄屋近藤一郎・山崎三郎)、第24区戸長は大庄屋の高原謙次郎(副戸長は庄屋森山庄太・小松宥八)が務めていますので、少なくともこの地域では、旧来の形を残しつつ新制度への移行がなされた、と言えるでしょう。同6年には戸籍区の再編が行われ、16の大区と279の小区が設置されます。御笠郡は第12大区となり、区長・戸長が勤務する調所が宰府村にも置かれます(同8年の調所の統合により廃止)。翌9年には大区を9つに減らし、御笠郡は那珂郡・席田郡とともに第8大区に再編

され、大区小区は同11年7月、郡区町村編成法の施行により行政区画として旧来の郡が復活するまで存続しました。『太宰府市史』は、この時期の状況を垣間見ることができる史料を収録しています(通史編Ⅲ・近現代資料編)。

太宰府市公文書館 藤田 理子

福岡藩では、前年に発覚した太政官札贋造事件により、明治4年7月2日、黒田長知が知藩事を解任され、同月12日、他藩よりも一足早く廃藩となつてしまいます。長知に代わって藩知事に任命されたのは、戊辰戦争で東征大総督を務めた有栖川宮熾仁親王で、廃藩置県後は彼がそのまま県令となりました。

地方の行政区画については、明治4年4月に戸籍法が公布され、翌年には戸籍の作成が始まりますが、新たに戸籍区を置き、戸籍に関する職務を扱う戸長・副戸長を設置する必要がありました。福岡

2月号の太宰府の文華に誤りがありましたので、お詫びして訂正します。

(誤)延寿王院の山門前↓(正)太宰府天満宮の境内